

## 読書の薦め

理学部教授 重松利彦

ある高名な数学者のところに、数学志望の高校生が訪れて、「大学で数学を学びたいと思っている。ついては、高校時代にどんな勉強をすればよいのでしょうか。」という質問をしたところ、その数学者は人気の高い推理小説作家の名前を挙げ、彼の本を読みなさいと答えたそうである。質問した高校生は、数学を一生の仕事にしよう、ついては高名な数学者のもとを訪問して教えを請おうと、勇んで訪問したのですから、何だ、こんな回答かとの思いを顔に出してしまったのでありましょう。そこで、件の数学者は、回答の本意を次のように説明したそうです。数学の論文を今日何ページか読んで残りの部分は明日読もうという風に細切れに読むことは出来ないから、読み始めると、論文を一気に読み理解する必要がある。その訓練には、推理小説もよいので、数学とは直接関係しない本であっても、夜を徹しても一気に読み終えるようであってほしいと考えているのだと。その数学者は本を読むことの効用がこれだけだと思っていたわけではなく、敢えてそれらについて言及しなかったのは、質問した高校生がこの答えに対し納得の行かない顔をしたからとのことです。

“数学を勉強する上で高校時代に何をせねばならないか”についての数学者の答えが、何故高校生には納得が行かなかったのでしょうか。これは2人が異なる座標軸で考えていたため、回答と、回答として期待した事との間にずれが生じたためではありません。2人の思考の座標軸は同じであったのですが、座標軸の単位長さが両者で大きく異なっていたため、ずれが生じたのです。高校生は非常に短い単位長さで刻んだ座標軸上での回答を期待していたのに数学者は非常に長い単位長さで刻んだ座標軸上で思考し、回答を出したのです。このため高校生が答えを期待した座標軸上に数学者の回答をプロットしようとしても、その点は、原点から無限に遠い所に位置してしまい、役に立つようには見えなかったのです。逆に、数学者の回答をうまくプロットできるような座標軸を選べば、高校生の期待する回答すべてが、あたかも原点上に位置しているように見えることになります。

実は、このような乖離現象は今に始まったことでなく、広く社会現象として定着してしまっているように見受けられます。このことについて少し考えてみたいと思います。近年、私たちの行動規範が役に立つか否かで決定されるようになってきており、その傾向はますます強くなってきています。例えば、大学受験について考えてみると、受験に必要な教科は勉強するが、必要ない教科は鼻から勉強しません。また、入学試験に必要な教科の勉強の仕方は、いかにして高得点を取るかに絞られています。先ほどの数学者が、推理小説を読みなさいと言ったことに関係したことは、本離れがあります。大学生に限らない現象ですが、読む本は漫画や週刊誌、それにせいぜいハウツウ物であり、それ以外の本を読むことが極端に少なくなってきています。

つまり、受験に必要な科目を勉強することや、小説や評論等を読むことは役に立たないからしないし、無駄なことであると考えようになってきているのです。ですがこれらは座標軸の単位長さの取り方が違っているから無駄に見えるだけで、単位長さをうまく取れば、役に立つことがわかるはずで、このことは何も、受験に必要な科目で高得点が取れるような勉強をすることや、ハウツウ物を読むことに意味がないとか、すべきでないと言っているわけではありません。両方とも必要ですので、両者を同時に表示できるような、座標軸上での単位長さの取り方を考える必要がある、といているのです。ここで、座標軸を対数表示すれば両者を同時に表示できることになります。役に立つかどうかで物事を

判断することは人間の思考方法として当然ですが、その際、判断基準となる座標軸を対数表示しておく必要があります。そのように考えると、大学時代にすべきことは、このような対数表示された座標軸で構成された空間を、いかに広く、かつ、高密度にうめていくかと言えるでしょう。つまり、普通の尺度で考えれば役に立たないように見えることを、どれだけ沢山積み重ねるかで人間の価値が決まることになります。何故なら、普通の尺度で考えれば役に立つことについては、誰もが取り組み、物にするよう努力するからです。

そういう意味では、図書館は一見役に立たないように見えることの宝庫です。そのあたりが、図書館は大学の顔であると言われる所以かもしれません。時間を作っては図書館を訪れ、本に親しんでほしいと思います。それでは、甲南大学の図書館はこの要求に答えられているのでしょうか。どのようにすれば答えられるのでしょうか。例えば、集書について必要なのは、大学時代にすべきことと同じでいろいろな役の立ち方をする本を幅広く選ぶことです。それも、役に立ち方がすぐ判るような本を重点的に選ぶのではなく、一見しただけでは役に立ちそうにもない本を手厚く選んでいくべきです。このように選び、購入した図書を、書庫にしまいこむのではなく、誰もが手にとって選べるよう開架書架に並べておく必要があります。そして、それらの図書を個人で読んだり、何人かのグループで読んだり、さらには情報機器と組み合わせ利用できるように、いろいろな形態の利用場所を作る必要があります。このようにすれば、図書館は今まで以上に充実したものになり、皆さんの役に立つと思います。